

ドイツの再生可能エネルギー・ナンバーワンの村
 ヴィルポルツリード村 (Gemeinde Wildpoldsried)

びっくりエコ発電所を立ち上げてもうすぐ半年が経とうとしています。そもそもこの取組を始めたのは、エネルギーに関しても、もっとみんなが知ることで、何かしら解決の糸口、持続可能なエネルギー供給の在り方を見出せるのではないかと考えたためでした。私たちの法人には、エネルギーの専門家はおりませんが、京都の各界のキーパーソンがおられます。そのような面々とエネルギーについて学び議論すれば、何かしら変えることができるに違いないと考え、京都市市民協働発電（太陽光発電）の第一号に挑戦しました。エネルギー問題は決して専門家だけが議論するべきものではない、もっとハードルを下げて、素朴な視点から創エネも省エネも考えることができるはずと思ったのです。そうして、強力な協力者の方々を得て、1週間で一般社団法人を立ち上げ、2ヶ月で太陽光発電を始めた訳ですが、決して太陽光発電でエネルギー問題が解決すると思った訳ではありません。再生可能エネルギーで一定量を賄おうと考えると、太陽光発電では限界があるのは自明です。そこで、京都の場合は、小水力やバイオマスなどが挙がってくる訳ですが、その導入をどのように進めることができるか？どのようにして需要と供給のバランスをとることができるか？なかなか具体的なイメージを持つことができずにいました。

ドイツのエネルギー政策については、3・11以降、改めて注目が集まっています（賛否両論・長短所があります）。いくつかの自治体では、エネルギーの自給自足（厳密には違う意味合い）を達成し、また兼業でエネルギー産業を展開することで、村おこし（限界集落から、緩やかな人口増加へ）につながっている事例があるということを知り、一度訪ねてみたいと思っていました。今回、門川京都市長の欧州・トルコ訪問にあわせて、再生可能エネルギーの取組においてドイツ No.1 とも言われる村に訪問することができましたので、印象に残ったことをご報告させていただきます。

なお、日曜日（6月9日）の訪問にも関わらず、村の助役の Günter Mögele 氏が、長時間、熱心に説明及び案内をして下さいました。



◆電力と熱、需要と供給のベストバランスを目指して

ヴィルポルツリード村は、ミュンヘン市内から鉄道を乗り継いで約2時間、ドイツ南部にある人口 2,615 人（2013年6月現在）の小さな農村です。

1996年に新しい村長（現在も継続）になり、1999年に住民へのアンケート調査を行い、それを基に、村民グループで2020年までの発展プランを作りました。その中の重要施策の一つがエネルギーであり、2010年には具体的な目標（2020年までに消費エネルギーに相当する再生可能エネルギーを生産する）を立てました。そうして、官民一体となって、風力、ソーラー、バイオガス、木質バイオマス、水力、地熱によるエネルギー生産を始めたのです。



それから約15年が経過し、今や村の電力消費量（約6,448メガワット時）の約5倍にあたる35,339メガワット時の再生可能な電力を生産するに至っています。それに加えて、主にバイオガス発電における排熱を利用した地域暖房も村のかなりの世帯をカバーしており、電力、熱、交通等をあわせた全体のエネルギー需要に対して、ほぼ同量以上の再生可能なエネルギーを供給できている、つまり自給自足できていると考えられています。

そのエネルギー生産実態を見てみると、特徴的なことは、様々なエネルギー源を組み合わせていること。一つひとつのエネルギー源には限界と得失があるため、試行錯誤しながら、生産を拡大しているのです。その結果として、現在は風力からの電力供給が最も大きく、熱供給ではバイオガス発電からの排熱利用が大きくなっていま

す。また、生産した電気や熱を経済的かつ効率的に使うことも重要なポイントです。その需供バランスを考えながら、一步一步、日進月歩でナンバーワンまで来るためには、様々な努力と協力がありました。

◆村のみんなの力

この規模の村であれば、自治行政機関を持たず、広域行政に委ねることも少なくないとのことですが、昔からのコミュニティを大切に、今でも村で政策を決定し、実行しています。その自治力が素晴らしいことは言うまでもありません。加えて、村への愛着に裏付けられた多くの人のリーダーシップによって、一般概念を覆し、目標に向かって挑戦をすることができたことも、ナンバーワンへの秘訣だと感じました。やはりドイツにおいても、再生可能エネルギーに対して懐疑的・批判的な視点も多く存在します。例えば、風力発電についても、一般概念として、騒音や野鳥保護への懸念が叫ばれてきました。ただ、実際に立ててみると、ほとんどそのような心配は取り越し苦労であることがわかったと言います。確かに、丘の上に十数基並んでいる風車の足元に行きましたが、ほとんど音はなく、また周辺生物への影響もないと感じました。ただし、京都や日本においては、全く風の吹き方が違いますので、京都において、風力に匹敵するエネルギー源、もしくは、日本の風土にあった風力発電技術を確保することが重要になります。



もう一つ印象的だったのは、村民、特に農家の方が、“Farmer and Energy farmer”、つまり農家であり、エネルギー農家でもあるという肩書であったことでした。彼らは、農業で培った知恵と技術を活用して、エネルギー設備に関しても、なんでも自分で作ってしまうのだそうです。例えば、村で一番大きなバイオガス発電設備を持っている農家の方は、自分で村の中心部まで地下パイプを通して、熱を供給しているのだそうです（日本では考えられませんが！）。彼らは、自ら学び、工夫して、再生可能エネルギーを生産している、私たちが不可能と思っていることを実現している姿に、条件が違うとは言え、勇気をもらいました。



◆世界でも評価を受ける村

ローマのアカデミッククラブでは、ウン・ボスコ・キョウト（Un bosco per Kyoto）という環境表彰をしているそうです。2008年にドイツのメルケル首相、2009年はオバマ大統領、2010年にはアル・ゴア元副大統領が受賞した名誉ある賞に、2012年、このヴィルポルツリードの村民が輝きました。多くの注目を集め、世界中の人が訪れるようになり、村民みんなも使える素晴らしい環境教育センターもできました。ですが、まだこの村の挑戦は続いています。風力発電については、この一年で、今ある発電機の凡そ倍の設備が立つそうです。また、村をあげての蓄電によるピークカット、スマートシステムの技術実証も始まりつつあります。

様々な刺激も感銘も受けましたが、何より、京都もナンバーワンを目指して、試行錯誤しなければならないと思いました。知恵を寄せ合って、合わせ技で、エネルギー問題に活路を見出したいと、決意を新たにす貴重な訪問でした。

※村の詳しい情報は、村のWEBからも見るができます。

（文責）浅利美鈴